

シンポジウム特集

幕臣前島密がみた文明開化の礎

田原 啓祐

① はじめに

郵政博物館では「明治150年」を迎える平成30年（2018年）を節目として、同年4月20日（金）から7月1日（日）まで、明治改元150年展「幕臣たちの文明開化」を開催し、幕臣たちが残した功績を紹介した。「幕臣」とは、幕府の長である征夷大將軍を直接の主君として仕える武士のことで、一般的には、江戸時代において徳川家の臣下のうち、1万石未満の禄を与えられた旗本および御家人と呼ばれる身分の者のことを指す。「歴史は勝者がつくる」といわれることがある。実際に、明治維新は西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允ら「維新の三傑」に代表される薩長土肥の志士が中心となって成し遂げたというイメージが強く、一方で倒された幕府側は旧態依然として遅れた存在とされてきた。しかし、明治元（1868）年、王政復古の発令により江戸幕府の廃止が宣言され明治政府が成立したことにより、幕臣たちは一斉に姿を消してしまっただけではない。幕臣たちもまた、開国により「世界」を知り、激動の時代にあって国の現状に危機感を持ち、勉学や実務に励み、自分の為すべきことを見出そうとしたのである。そして彼らの多くは引き続き明治政府に継続登用され、様々な政策の礎を築くのに重要な役割を果たした。

本稿では、明治前期の政府にあって、近代国家形成のため郵便事業を始めとする諸制度諸事業の確立に携わった前島密の幕臣時代（35歳）までの活動を中心に検討し、近代化の一つの到達点である「文明開化」において幕臣がどうかかわっていったのかについて考察してみたい。

② 幕臣のたどった道

慶応4年4月（1868年5月）、江戸城が無血開城された。徳川慶喜は水戸へ隠居し、田安亀之助（後の徳川家達）が徳川宗家の家督を相続して、翌5月、徳川家に対し駿河府中（静岡）移封が決定され、70万石が与えられることとなった。

その後、旧幕臣（旗本・御家人）が採った選択肢として、樋口雄彦氏は、①徳川家に追随し、静岡へ移住する⁽¹⁾、②「朝臣」として新政府に所属する（約5,000名）、③武士の身分を捨て、帰農、帰商する（約4,500名）、上記選択肢以外の行動として、④新政府軍への抗戦（戊辰戦争への参戦）を掲げている⁽²⁾。

ここで、初期通信事業に携わった3人の幕臣出身者、前島密、杉浦讓、榎本武揚の明治初年までの略歴をみておこう。

1 廃藩置県後の明治4年8月の時点で、静岡へ移住した士族は13,764名と記録されている（静岡県編・発行『静岡県史』資料編16 近現代一、1989年、138頁）。

2 樋口雄彦『幕臣たちは明治維新をどう生きたのか』洋泉社、2016年。

前島密（天保6（1835）年～大正8（1919）年）は、越後国（現在の新潟県上越市）に豪農上野家の次男として生まれる。幼名は房五郎。天保13（1842）年、叔父の糸魚川藩医相沢文仲に養われ、医学を志す。弘化元（1844）年、高田の儒学者倉石侗窩の門人となる。同4年、12歳で江戸に出て医学、英語などを学び、安政4（1857）年、幕府の軍艦教授所の見習生となり機関学を学ぶ。さらに箱館の諸術調所の武田斐三郎に入門し、航海実習生として日本沿海の測量に従事（この頃、巻退蔵と名乗る）。文久3（1863）年外国奉行組頭の向山栄五郎に随行して対馬に赴き、長崎へ滞在。慶応元（1865）年、薩摩藩に招聘され、開成学校の英語教授となる。同2年、幕臣前島家の養子となり、来輔と名乗る。翌3年に開成所の数学教授を拝命。同4年東征軍応接役として東海に出張。徳川家処分により駿河に移住。維新後は新政府の民部省に出仕し、郵便事業の創業をはじめ数多くの新制度確立に尽力した⁽³⁾。

杉浦讓（天保6（1835）年～明治10（1877）年）は、甲斐国山梨郡府中（現在の山梨県甲府市）の代々甲府勤番士を務める家に生まれる。幼名は昌太郎。天保8（1837）年愛蔵と改名。弘化2（1845）年勤番子弟の学問所である徽典館に入り、19歳で助教授となった。文久元（1862）年に江戸に派遣され、外国奉行支配書物出役となり、後に調役に昇進。文久3（1863）年に幕府の外交使節の一員としてフランスに派遣され、慶応3（1867）年にも遣仏使節団に参加し渡航する。慶応4（1868）年、外国奉行支配組頭となるなど主に外交官僚として活躍した。明治維新後、徳川家達に従って静岡藩に下るが、郷純造らの推挙で明治新政府に召されて民部省改正掛に入る。前島密とともに郵便制度の確立に努め、前島が明治3（1870）年の海外視察中に行われた郵便制度の開始時には責任者として尽力した⁽⁴⁾。

榎本武揚（天保7（1836）年～明治41（1908）年）は、江戸下谷御徒町柳川横町（現在の東京都台東区浅草橋付近）に西丸御徒目付・榎本武規の次男として生まれる。田辺石庵に儒学を学んだ後、弘化4（1847）年、昌平坂学問所に入学（嘉永3（1850）年入学の説もある）。安政元（1854）年、箱館奉行堀正熙に随行し蝦夷地・樺太を巡視。安政2年に昌平坂学問所に再入学、さらに同年に長崎海軍伝習所員外聴講生となる。翌年昌平坂学問所を退学し、長崎海軍伝習所第二期幕府伝習生となる。ここでカッテンディーケやポンペらに機関学や航海術・兵学・科学を学ぶ。安政5（1858）年海軍伝習所を修了の後、江戸の築地軍艦操練所教授となる。またこの頃、ジョン万次郎の私塾で英語を学ぶ。文久元（1861）年、オランダに留学。船具、運用、砲術、機関学を兵学校で、国際法をライデン大学のフィッセルリングから学ぶ。慶応3（1867）年帰国、明治元（1868）年海軍副総裁となる。同年8月旧幕府艦隊8艘を率い脱走、五稜郭と箱館を占領し官軍に抵抗するが、翌年降伏し、投獄される。明治5（1872）年赦免の後政府に出仕し、駐露公使としてロシアと樺太・千島交換条約を締結した。以後海軍卿・逓信大臣・外務大臣等を歴任した⁽⁵⁾。

先述の選択肢にしたがってそれぞれの半生を分類すれば、前島は豪農の家に生まれ、幕臣となった後、①→②となり、杉浦は甲府勤番士を務める家に生まれ、前島同様①→②となる。旗本の家生まれた榎本は新政府軍との交戦を選び、降伏し投獄されたのち赦免され、政府に出仕したので④→②となる。ほぼ同年代に生まれた3人には、幕臣出身から新政府の創業期の駅通・通信事業に関わったという共通点があるが、それぞれ出自が異なり、その後の進路も単純ではないことがうかがえる。

3 「年譜」（『鴻爪痕 前島密伝』財団法人前島会発行、1920年所収）等を参考にした。

4 「杉浦讓年譜」（『杉浦讓全集』第5巻、杉浦讓全集刊行会発行、1979年所収）等を参考にした。

5 「附 榎本武揚年譜」（榎本降充・高成田享編『近代日本の万能人・榎本武揚 1836-1908』藤原書店、2008年所収）等を参考にした。

③ 西洋文明との接触—世界を知り、^{くに}日本を知る—

本章では、「幕臣」となるまでの前島密の経歴を追ってみることにしたい。前島密の生涯については、自著である『自叙伝』⁽⁶⁾、『行き路のしるし』⁽⁷⁾のほか、すでに小田嶽夫氏⁽⁸⁾、山口修氏⁽⁹⁾、橋本輝夫氏⁽¹⁰⁾、小林正義氏⁽¹¹⁾、井上卓朗氏⁽¹²⁾による伝記がある。ここでは、『自叙伝』、『行き路のしるし』を中心に前島密の学んできたことに注目していく。

(1) 医学志望よりの転向

先に述べた通り、前島密（幼名房五郎）は越後国頸城郡下池部村の豪農上野家に生まれたが、直後に父助右衛門が亡くなり、4歳の時母ていに連れられ高田に移住し、しばらくは教養の深い母が幼少の房五郎に裁縫など内職のかたわら読み書きや歴史物語、詩歌を教えていたが、7歳の時、糸魚川藩の藩医を務める叔父相沢文仲の勧めで母とともに糸魚川の相沢家に移り、そこで医学を志し、患者の取り扱いや薬剤の調合などを学び、医書に接する機会を得た。またこの地の寺に通い和漢書も学んでいる。糸魚川で4年を過ごし10歳となったとき、名声の高い江戸の儒学者安積良斎に学び高田城下で漢学塾を開いている倉石侗齋がいることを知り、母のもとを離れ下池部にいる兄のもとに身を寄せ、そこから約2里離れ冬は屋根まで雪が積もる豪雪の地高田まで2年半通い、儒学の基礎を学び取った。

しかし房五郎の本来の志望は医学の習得であり、糸魚川や高田では漢方医学しか学べないが、江戸に出ればオランダの進んだ医術を学ぶことができると聞き、12歳の時に母の許しを得て、わずかな旅費と学費をもって江戸に旅立った。

弘化4（1847）年、江戸に到着した房五郎であったが、身寄りも当てもない状況だった。そこで一関藩に仕える儒学者都沢亨の塾生となり、ようやく落ち着いたが、文具や日用品を買い求めたら3か月分の学費にも満たない額しか残らなかつた。しばらくは開業医の書生として雑用の日々を過ごしていたが、紹介者があり、幕府の官医添田玄斎を手伝うこととなった。

嘉永2（1849）年、房五郎は叔父相沢文仲の死去により同家の相続問題で一旦故郷に戻るが、解決の後再び再び江戸に出て、幕府の官医長尾全庵の家に寄宿することとなった。食の心配もなくなり修行にいそしんだ房五郎であったが、当初は収入がないため学費はすぐに尽きてしまった。しかし、江戸で知り合った水戸浪士桜井任蔵と日本橋四日市に出店している達磨屋伍助の紹介により、筆耕の仕事を得た。

当時は書物が極めて高価であったため、筆写本の注文は盛んにあった。房五郎はこの仕事により収入を得たのみならず、筆写により世情を知ることができた。特に桜井の筆耕依頼によりドイツの兵法や西洋事情を知る機会を得、当時人気があったドイツの戦術書『三兵タクチキ』（オランダ語版を高野長英が邦訳したもの）は三度も写本し、本の大略を暗記までしている。この経験を前島自身「余が不才ながら開国主義に一步を入れたる発端なれば、漢学大儒の門に

6 前掲、『鴻爪痕 前島密伝』所収。

7 前島密「行き路のしるし」1881年11月（前島密自筆原稿）、前島記念館収蔵。同資料を解読した文献として、橋本輝夫監修『行き路のしるし』日本郵趣出版、1986年がある。

8 小田嶽夫『前島密』財団法人前島密顕彰会、1958年。1958年刊行の『前島密』を一部縮約し現代文に改めたものとして、同『前島密』財団法人通信事業教育振興会発行、1986年がある。

9 山口修『前島密』吉川弘文館、1990年。

10 橋本輝夫『時代の先駆者 前島密 —没後80年に当たって—』ていしんPRセンター株式会社、2003年。

11 小林正義『近代の英傑前島密—その生涯と足跡（上巻）』通信研究会、2005年。

12 井上卓朗『前島密 =創業の精神と業績=』株式会社鳴美、2017年。

入りて教授せられたるにも優れる快事なりとす」⁽¹³⁾と回顧している。

そして、房五郎の大きな転機となったのが、嘉永6（1853）年、浦賀に現れたペリー艦隊を実際に目の当たりにしたことであった。18歳となった房五郎はすでに書物で西洋事情にも詳しくなり、黒船や西洋の将兵を実際に見たいと考えていた。折しもペリー提督フィルモア大統領の親書を授受する儀式で応接する役目を担った井戸石見守弘道が久里浜に赴くこととなり、房五郎は石見守の随行員として同行する機会を得た。

そこで実際に見たものについて前島は「米国軍艦の江戸湾に侵入せしより、海防の論議到る処に於て囁囁（ごうごう）たり…（中略）…砲台建造の如きは、其事当然なれども、之を唱ふるものも其建造法、大砲の鑄造法を知らず、況んや其要する費額に於てをや。畢竟彼等は其实地を知らざる罪に坐するなり」⁽¹⁴⁾と語っている。そして、「実地を知らずして論策するは、恰も盲者と夢を談ずるよりも愚劣なり。方今最も急務とするは国防なり」⁽¹⁵⁾と断じ、ここで当初の医学の志を変え、国防考察のため全国の港湾や砲台を見分する旅に出たのである。

房五郎は、まず江戸から信濃路を経て郷里の母と兄に再会し、そして北陸道から山陰道を経て下関に至り、そこから船で小倉へ渡り長崎へ到着した。そこで砲台を見学してから肥後、日向に出て九州の東海岸を北上、豊後より伊予に渡り、讃岐を経て、紀伊・伊勢から三河に渡り東海道を通り下田から船に乗り江戸へ帰ってきた。日本の大半を回る大旅行であったが、房五郎自身は大きな収穫を得たとは考えられず、「学無くして徒に妄動するは、実に狂者の所為なりと、痛く自ら戒むる所ありし……」⁽¹⁶⁾としている。

(2) 航海運用術の習得と実業家的感覚

その後、友人の斡旋により旗本設楽弾正の屋敷に住むことになった。林大学頭の親戚である設楽家には大学頭の蔵書があり、それを閲覧することができた。また設楽弾正の兄に、後に外国奉行として外国との条約交渉に当たることになる「幕末の三傑」と呼ばれた岩瀬忠震がおり、岩瀬から英語を習得することが重要であることを説かれた。しかし当時の江戸には英語を教授できる人物はおろか英語の書物を求めることも難しい状況であった。

そこで、安政3（1856）年、房五郎は幕府の御船手頭を務める旗本江原桂介から海軍学を学ぶために、江原の屋敷に移り住んだ。江原は間もなく転職となったが、江原の屋敷には長沼流の兵学に詳しい榎徳之進が住んでおり、ここにとどまり榎から兵学を学んでいた。

翌安政4（1857）年、幕府の御用船で洋式軍艦「観光丸」が長崎から江戸に回航してきた。その運用長としてこの船に乗り込んでいた竹内卯吉郎が江原の屋敷を訪れ、房五郎と接する機会を得た。房五郎は竹内に自分の志を語ったところ、竹内は大いに激励し、機関学を教え、幕府新設の海軍操練所の生徒とし、観光丸が江戸湾を出港するときの試運転に、規則外の見習生として同乗させた。

海軍操練所に入った房五郎は、話をするに足る人物とみればその人を捉まえて、次のような問答をしたという。

海軍は独り自ら隆盛になるべきものと思うかと問へば、否我々は海軍学を能くするも、軍

13 前島密『自叙伝』、15頁。

14 『自叙伝』、16頁。

15 『自叙伝』、17頁。

16 『自叙伝』、18頁。

艦無ければ其用を為さざるなり。然るに軍艦を造らんとすれば、国庫乏しくして資を供する能はず。今の計は地租を増徴して其費を弁ずるに在るのみと、異口同音に言へり。余は、実に然りとなしたり。所聞に依れば、西洋に於ては国力を以て物産を起し、貿易を盛にし、商税を課し、之を以て海軍の基金と為し、軍艦を造り、士卒を養ひ、常時不常時を問はず、商船及積貨の安全を保護し、以て相互の利益を図ると云ふ。斯の如くならざれば、富国強兵の道は立たずと謂ふべし。故に余は是等の人々に対し、君等は海軍の隆興を図ると共に、商船界のことをも深く図らざるべからずと談じたるに、彼等は皆曰く、武士は文武を主として、商業の賤きを談らず。君の談の如きは、西洋にして始めて可なり。我国の有司は則ち然らずとて、一笑せり⁽¹⁷⁾。

この問答より、房五郎はこの時点で海軍のみならず商船界に目を向けていたことがうかがえる。西洋に伍するために軍事力は必要だがそれを支える資金を提供できるだけの国力が必要であり、そのためには西洋のように産業を振興し、貿易を盛んに行い国富を増大することこそ肝要と考えたからである⁽¹⁸⁾。前者については官軍操練所で共に学ぶ生徒たちも同意するが、海軍の増強とともに商船界の振興にも目を向けるべきという後者の意見については、「商業の賤き」として取り合わなかったのである。

これを房五郎自身は、「本邦武士の習風」と諦観しているが、それは「生来の」武士たちの常識的な視野だったのであろう。房五郎がこの時点で実業家的発想を持ち、さらには政治家的発想の萌芽も見受けられるのは、医術、儒学、兵学に限らず様々なことを精力的に学んだことや、全国見分の旅での実体験によるところもあったと思われるが、房五郎の出自がマージナルな階層であり、「生来の」武士身分にありがちな視野の限界といったものに捉われなかったことが大きいであろう。そして箱館に設けられた幕府の諸術調所の教授・武田斐三郎が同港に停泊しているアメリカの商船長ボーデッティを招聘し、商船とその業務について学び、生徒も聴講していることを伝え聞いた房五郎が、この問いに対する答えを期待して箱館行きを決意したことも当然のことであった。

安政5(1858)年箱館に向けて出発する際に、房五郎は巻退蔵(もしくは巻退蔵密)と名乗るようになった⁽¹⁹⁾。箱館についた退蔵は、箱館奉行所の奉行所頭栗本瀬兵衛(鋤雲)を頼り、その紹介で調役山村惣三郎の子源太郎の家庭教師となり、同家に住み込んで武田斐三郎の塾に入門する機会を待った。そして、翌安政6(1859)年、退蔵はようやく入塾を許されたが、武田は多忙のため教授する時間がなく、ボーデッティも一年前に去ってしまっていた。そこで退蔵はボーデッティの航海書により測法と測器の用法等を独学で学んだ。

退蔵の実業家的才覚の一端を知る出来事がある。ある日、武田が「諸術調所の箱館丸は船具が不完全で、運用術の実習には不十分だが、測量術実習には不足しない。しかし実習を行うには幾多の経費を要するため、これを如何ともすることが出来ないのが遺憾である」と言った際、

17 『自叙伝』、21～22頁。

18 軍艦の建造と貿易の関係については、房五郎の師である安積良斎も指摘しており、嘉永元(1848)年に記した国防論、『洋外紀略』の「巻下 海防」に、「彼多大船者、以其通商于万国。故所得足以償其費。我之用之戦闘与漕運爾。而欲損数百万金、以造数十隻、非財力所能給也。(彼(=外国)の大船の多き者は、其を以て万国に通商す。故に得る所、以て其の費を償うに足る。我(=日本)惟だ之を戦闘と漕運とに用うるのみ。而して数百万金を損じて、以て数十隻を造らんと欲するは、財力の能く給する所にあらざるなり。)」とある(村山吉廣監修・安藤智重訳注『洋外紀略 安積良斎』明徳出版社、2017年、264～268頁)。

19 幼時に学んだ『中庸』にある「卷之則退蔵於密」(之を巻けば則ち密に退蔵す)の句から採ったものである。

退蔵は武田に「蝦夷の海産物の価格は安い、大坂方面では高値で売れるので、海産物を運搬して売却すれば、測量術実習の経費を賄って余りある。ただし箱館丸は官船なので商人と利を争うことは許されないだろうから、名目を日本海測量として、荷足のために海産物を積みばよいだろう」と建議し、武田は拍案してこれを承諾したという。同年7月、箱館丸は日本沿海の測量を目的として、昆布を荷足として積み込み出帆した。船は佐渡、隠岐に立ち寄り、下関と長崎にて積載の昆布を売却した。武田の郷里である伊予長浜に寄泊の後、兵庫を経て播州堺浦にて10日間停泊、この間に奈良等の勝地を清遊し、10月半ば頃に堺浦を出港、浦賀港に入り、11月初めに山崎を出港して宮古の鯨ヶ崎港に停泊した。この時期は連日の風雪が激しく乗組員の冬衣の準備も十分でなかったため、春まで停泊することとなり、退蔵はこの間に武田に随行して釜石の大橋・橋野の溶鉱炉の見学も行った。そして翌春箱館に帰港したのである。さらに万延元（1860）年、箱館丸は再び航海することとなり、退蔵は箱館奉行から測量役を命じられての出航であったが、大いに不満の残るものであったという。その航海の目的は「貿易奨励」という名目だったが実際は全くの営利目的であり、海産物が士官室にまで満載されていた。退蔵は、この状況を次のように述べている。

余は以為らく、当時の国情に在りては、官は宜しく洋形船の堅固、快速、船内規則の整備、営業上の有利等を示して、人民を指導すべきなり。然るに其等の意義なくして単に営利を目的とするは不可なり。況んや官吏は、営業上老商に及ばざるをやと（物産の買入は御用商人に依るを以て）。乃ち卑見を武田氏に陳べしに、氏は唯々同感なりと答へたるのみ。時に井伊大老の変あり、上国の形勢愈々險悪ならんとす。余豈一商船の乗員となりて、無聊に時を費さんやなど慨歎せしも、之を如何ともすること能はざるを憾めり⁽²⁰⁾。

退蔵が航海術を学んできたのは、あくまでも「官」の役割を果たすためであり、それは西洋の脅威を正しく認識し、人民を指導することであった。その意義なくただ「商船」のように営利を目的とした航海を行うことに時間を費やすことを退蔵は嘆いているのである。ここに退蔵の生来の武士とも商人とも異なる「限界的階層者（マージナル・マン）」⁽²¹⁾としての現状に対する不満と、政治家的志士としての視点を感じ取ることができるのである。

その後、退蔵は廻船業者やその船員、陸上の執務者の業務の実際に興味を持ち、廻船業者の手代となって海陸両方面の仕事に従事し、樺太南岸まで航行したが、江戸の友人より「速に帰来せよ」と便りがあったため、箱館奉行支配組頭の向山栄五郎が江戸に帰ることを聞き、これに同行して一旦江戸に戻ったのである。

(3) 長崎・鹿児島行と西洋文明との接触

文久元（1861）年2月、ロシア軍艦対馬占領事件（ポサドニック号事件）に対処するため、外国奉行野々山丹後守の随行者として向山栄五郎が選ばれ、退蔵は請われて向山に随行し、対馬に向って出発した。奉行一行が対馬に到着した時には、イギリス艦隊の介入によりロシア軍艦が退去した後であったので、一行は対馬全島を視察し、12月下旬に肥前藩の汽船に乗り込み帰途についた。

20 『自叙伝』、32頁。

21 マージナル・マン（marginal man）は、周辺人、境界人と訳され、複数の異質な社会や集団に同時に属し、いずれにも影響を受けながらも、いずれにも完全には帰属していない人間のことをいう。ここでは、江戸時代の身分秩序（武士、農民、商人）の範疇に収まらない階層の者を指す。

対馬視察の際、退蔵は、ロシア艦が繫留した跡地である芋崎で、ロシア風の家屋が建築され、菜畝が開拓される等、「永遠の計」が着手されていた形跡を見、さらに湾口の高所に斥候所を置き、占領防衛のための施設を設けていたことを知り、「実に憤怒を禁じ得ざりき」と述懐し、より海外の脅威と国防の必要を認識するようになる。

文久2(1862)年頃より、退蔵は長崎での留学生活を始めていた⁽²²⁾。そこで退蔵は、後の郵便創業のための大きなヒントを得ている。一年前、箱館丸に測量担当として乗船して長崎に赴いた際、長崎で『漢訳聯邦志略』という本を入手しそれを読み、その本の中の「其設官分職」という章に、「駅逋院長は水陸の駅伝を掌理し、国内に送る書簡、国家間を往復する書簡にかかわらずその送達距離に応じて料金を決定し、これによってそれぞれ料金を徴収する」と書かれているのを見つけた。そこで私は、アメリカでは信書の料金というものをすべて政府が定め、かつ飛脚業者の業務にも政府が介入することによって、国内はもちろん、外国までも広く送達する方法を実現することができるのではないかと考え、「胸中一縷の光明を認めたるの感ありき」⁽²³⁾と述懐している。

当時長崎には外国宣教師が訪れており、彼らは幕府の通訳官に英語を教えながら、通訳官から日本語を学んでいた。退蔵は長崎でアメリカの宣教師ウィリアムズ、さらに同じく宣教師フルベッキより英語と数学を学ぶ機会を得た。あるとき退蔵はウィリアムズとアメリカ事情について話をした際に、アメリカの通信制度について質問した。ウィリアムズは、「国家において通信というものは、ちょうど人体における血液のようなもので、人体は血液の循環によって生きることができ、健全でいられる。そして、血液が循環できるのは血管があるためである。もし血管が詰まってしまえば、人体は健全さを失い、その生存さえ危ぶまれる状態に陥ってしまう。これを国家に例えれば、血液は通信であり、血管は駅逋である。したがって、駅逋事業の興廃はまさに国家の盛衰に関わるのである」と通信の重要性を説明し、さらに一通の封書を手箱から取り出し、その表面に貼ってある郵便切手を示しながら、「これが我が国の政府の定めている料金の納付証であり、この切手が貼られた信書は、本国の国内はもとより、郵便条約を締結した国であればどこでも郵便料金が支払い済みであるとの証明がなされ、配達されるのだ」と郵便の概要について説明した。退蔵はこの話を聞き、我が国の通信方法を急いで改善することが必要であると一層感じながらも、この時点ではどうすれば完全な通信の仕組みを作り上げることができるのかについては、さしたるアイデアも思い浮かばなかったと述懐している⁽²⁴⁾。

文久3(1863)年11月、退蔵に大きな転機が訪れる。長崎で英語稽古所の学頭を務めていた何礼之(がのりゆき)が池田筑後守を正使とする遣欧使節の通訳官として同行することを命じられ、江戸に招聘された。このとき1名の従者を連れていくことを許された。退蔵は欧州の実況を見聞したいと熱望し、何に志願し受け入れられた。両名は福岡藩の船コロンビア号に乗船したが、船の故障により期日に遅れて江戸に到着したところ、使節一行はすでに横浜を出港した後だった。渡欧の機会を逃し、長崎への帰途に就いた退蔵であったが、この往復の道すがら何から直接英語を学ぶ機会を得た。

22 退蔵がこの時期に長崎に滞在することになった理由については、自伝などにも詳細は記載されていない。『行き路のしるし』に「廿六歳ノ秋ヨリ長崎ニ於テ英書ヲ学ヒ従事シ」とあるのみである。しかし退蔵の26歳時は万延元年にあたるので、これは記憶違いである。山口修氏は、「おそらく退蔵は対馬からの帰途、博多あたりで奉行たちの一行と別れ、長崎に赴いたのではあるまいか。そして箱館における学習、および箱館丸に乗組んだ経験を生かして、請われるままに操船の技法を教えたのであろう」と推測している(前掲、山口修『前島密』、60頁)。

23 前島密談「郵便制度は如何にして生まれたるか」『通信協会雑誌』第1号、1908年8月25日、37～38頁。

24 同上、38頁。

元治元（1864）年春、長崎に戻ると何は自宅に英学の私塾を開いた。何自身は多用により授業の時間がなかなか持てなかったため、退蔵が塾頭となり、長崎奉行に紹介し、あるいは先述の宣教師フルベッキに授業を依頼する等、学事上多くの援助を得た。翌年には長崎奉行の支援で塾舎を新設。塾生は百数十名を数えた。慶応3（1867）年7月、何が幕府の命により開成所教授並となり、江戸へ赴いたため、何の長崎の英学塾は3年間という短期間で終わることとなったが、この間何の教えを受けた者には退蔵のほか、高橋新吉、前田正名、芳川顕正、陸奥宗光らがいた。

また当時、英学塾で学ぶ仲間の中には生活資金にも苦労する者がいることを聞き、彼らのために禅宗寺の空堂を借り、互いに助け合って学業に励むための合宿所とし、何に承諾を得て「培社」（ばいしゃ）と称する学舎を開設した。所長兼学長は瓜生寅（うりゅうはじめ）に依頼し、退蔵は財政を担当していたが、自身も金銭に乏しいため、開設して数日後には私物を米屋に売却して食費に充てねばならないほど苦しい状況であった。

退蔵が培社の運営に苦心しているとき、培社の一員であった薩摩藩士鮫島誠造より近年鹿児島に開設された開成学校の英学教員として鹿児島に来るよう要請を受けた。退蔵は、自分は本来学究を目指している者ではなく、英学も未熟で薩摩藩の召集に応ずべき技量もないと固辞したが、再三の要請により最終的に応じることとなった。退蔵は鹿児島行きを一月延期し、運営資金を支援するために、紀州藩の依頼で蒸気船明光丸の汽関士長としての仕事を請け負ったが、瓜生の金銭不祥事がきっかけで、ついに培社は経済的に破たんし閉鎖することとなった。培社運営の期間は短く、その仲間は10名程度であったが、先述の芳川顕正や林謙三、鮫島誠造ら逸材がそろっており、退蔵はこの時の仲間と終生親交が続くことになった。

元治2（1865）年1月初旬、退蔵は薩摩藩の汽船に乗り、鹿児島へ赴いた。鹿児島では丁重な待遇を受けたが開成学校の生徒の数が日に日に増えてきたため、一人では授業が十分に行えなくなったため、培社の書生であった林謙三と橋恭平を助手として招聘した。当時、開成学校を監督する立場にあったのが、大久保一蔵（のちの利通）であり、ここで退蔵と大久保は出会っている⁽²⁵⁾。

また、この地で退蔵は将来の大きな課題を得ている。鹿児島に赴いてやや薩摩言葉に通じるようになったころ、退蔵は書生を集めて演説を試みた。薩摩言葉やそのなまりも交えて分かるようにと苦心したが、演説後に書生たちに「自分の意を領されたか」と尋ねたところ、皆一斉に「解り申さず」と答えたのに失望している。そしてこのとき「自分はシミジミ国に共通する語学が無くてはならぬ」⁽²⁶⁾と感じており、将来、国語改良問題に情熱を持って取り組むきっかけの一つとなったのである。

鹿児島に滞在して1年経ったころ、薩摩藩内の情勢は倒幕路線を歩むようになり、倒幕論に批判的な立場をとる退蔵とは考えを異にすることとなった。同じ時期に郷里から知らせで兄又右衛門が死去した知らせを受けたことを機に、退蔵は薩摩藩に帰郷を訴え、鹿児島を去ることとなった。

前島の長崎・鹿児島における英学習得および教育活動については、自伝にもあまり詳細に記されていないため、その評価は難しい。英学を学んだのも、退蔵自身が述べているように「学

25 退蔵は大久保の家を訪問した際の歓談にて、大久保より海軍士官となることを求められるが、自身は商船事業の世話役となることを望み、同事業の改革・振興に尽力したいことを述べている。この縁について後に、「明治八年に至り、政府に商船の議起るに及び、公が余を信任するの伏因と為れる者なり」と述懐している（『夢平閑話』（前掲、『鴻爪痕 前島密伝』所収、434～436頁））。

26 『逸事録』（前掲、『鴻爪痕 前島密伝』所収）、301頁。

究」のためではなく、岩瀬の勧めにより「政治的志士」として世界の大勢を知るための手段を学んだに過ぎなかったからであろう。しかし、そこで逓通（郵便）事業の開設、国語改良という将来挑むべき課題を得たこと、終生の友人たちを得たことを挙げても、退蔵にとって大きな意義があったことは間違いないだろう。

また、大久保利謙氏が指摘するように、退蔵が長崎で何礼之から英学を直に学び、後に鹿児島の開成学校で教授を担ったことは、何礼之に代表される長崎の英学が鹿児島へ分派・進展したことを意味し、これは英学史の観点から見れば重要な事と思われる。長崎の何礼之の塾は塾主何が江戸に去ったことにより途絶えたが、何に師事した退蔵が鹿児島の英学の創設に大きな役割を果たしたことになる⁽²⁷⁾。退蔵の鹿児島での教育活動の実際については詳細な記録がないが、開成学校の教授を辞する際に「多数の書生は別を送りて、三里外の某村に到り、再び盛なる宴を開き、特に惜別の歌を造りて合奏せり」⁽²⁸⁾と深い感謝と惜別の情を寄せられていることから、同所の教育に大きく貢献したものと推測できる。

4 「幕臣」前島の国家に対する認識—己が為すべきを知る—

慶応2（1866）年、江戸で落ち着いていた頃、退蔵は旗本平岡熙一に招かれた時、「足下薩州の優待を辞し、来て幕府に臣事せんと欲するは、予等の多とする所なり。然るに其経歴に依て考ふれば、未だ安からざる所無しとせず。請ふ本日は足下の抱持せる赤心の底を吐露せよ」と求められるが、それに対し以下のように答えている。

余は単に大日本政府に事へんことを庶幾するのみ。抑々幕府は今其権力を毀損し、衰勢に瀕せりと雖も、内に在ては猶諸藩を統理するの形式を存し、外に対しては一国を代表して主権者の位置を保す。是れ即ち日本帝国の大政府たり。然りと雖も帝国の歴史は殊別にして、今や即ち正理公道に基き、内を治め、外に対するに非ざれば、帝国は維持すべからず。故に忌憚無く極言すれば、幕府は潔く大政を京師に奉還し、以て真正なる日本大政府を建造せられん事を希ふのみ。然るに幕府在廷の人は、唯其衰勢を挽回せん事に専心し、国情如何を察せずして、遂に君上の聡明を壅蔽す。是れ余の如き者と雖も、憂慮に堪へざる所なり。故に自ら揣らず、幕府に臣事し、機を得て君上に拝接し、薩藩其他の情実、中外の所論を仔細に陳述し、其聡明を回し、此革新を断行せられんことを願ふ。是れ余が赤誠なりと⁽²⁹⁾。

山口修氏は、退蔵がこの時点で大政奉還論を提示していることに注目しているが⁽³⁰⁾、退蔵が幕府に仕えることを「選択」したことも注目すべきであろう。平岡と面談することとなった経緯については詳しく記されていないが、この面談以前に平岡に退蔵の幕府への出仕を望んでいること、薩摩での経歴を打ち明けていることがわかる。退蔵は薩摩藩において当初は客分の扱いであったが、やがて藩士の身分（小姓組）に列せられていた⁽³¹⁾。再び薩摩藩士として復帰することは可能だったはずであるが⁽³²⁾、幕府が衰退の途にあることを知りながら幕臣とな

27 大久保利謙『幕末維新の洋学』大久保利謙歴史著作集5、吉川弘文館、1986年、356～363頁。

28 『自叙伝』、41頁。

29 『自叙伝』、42頁。

30 前掲、山口修『前島密』、75頁。

31 『夢平閑話』、435頁。

ることを望んだのは、退蔵自身が「抑余ハ大政府即チ日本政権ノ所在ヲ以テ士官ノ地トナルヲ素志トシ、殊ニ幕府ノ開国通信ノ政策ハ条理ニ国形ニ時運ニ拠リテ決シテ当ヲ失ハスト自ラ認ムル所」⁽³³⁾と述べているように、自らの宿志と幕府の政策が合致したためであった。

その後退蔵は、平岡から前島家を相続する話を持ちかけられた。京都見廻組に属する前島錠次郎が跡継ぎのいないまま亡くなったため、前島家の親族である吉沢照房から平岡に前島家を相続する適任者探しを平岡から依頼されていたのであった。退蔵はこれを承諾し、慶応2(1866)年3月に前島家を継ぎ、同年11月10日(1866年12月6日)幕府より公式に相続が認められ、前島来助(来輔)と名乗った。そしてこの頃に来助は幕臣清水與一郎の長女奈可と結婚した。

こうして幕臣となった来助であるが、当初は無役であり、友人たちの忠告もあったため、しばらくは家で読書にふける日々を送っていた。そのうち近隣の子弟に請われて英語や漢書の読み書きを教えていたが⁽³⁴⁾、幕府開成所の頭取である松本寿大夫より反訳筆記方に欠員が出たため、出仕の要請があり、退蔵はこれに応じ同所に勤務することになった。さらに慶応3(1867)年5月に、開成所の数学教授となった。

しかし、兵庫の開港が近いことを知り、「幕府ノ開国通信ノ政策」に尽力したいと考えていた来助は、例え地位が低くとも、開港地の役人として外交事務に携わるべく、兵庫奉行柴田日向守に懇願し、同奉行手付として出資することとなった。兵庫では、イギリスのお雇い外国人シイルと御用船に同乗することを命じられ、船中で税関や保税倉庫の事務について教わる機会を得た。退蔵は港湾事務に習熟するとやがて頭角を現すようになり、慶応4(1868)年正月元日に兵庫奉行支配調役に昇進した。しかし、この時期政局は一変しており、前年10月14日に將軍徳川慶喜は大政奉還の上表を朝廷に提出し、12月9日、王政復古の大号令が発せられ、小御所会議にて慶喜に辞官・納地が命じられていた。来助が昇進して間もなく、幕府軍敗北、將軍慶喜が江戸に向かった報が知らされ、兵庫奉行も部下一同を率いて江戸に退去するよう通達された。兵庫奉行は消滅することとなったが、江戸にもどった来助は慶応4年2月に勘定役の徒士目付となった。目付役平岡熙一に属して、官軍迎接役として東海に出張するよう命じられたが、小田原に到着した時には官軍の先陣が関門を設けており前進することができず、むなしく江戸に帰らざるを得なかった。

9月8日、明治と改元され、❶の冒頭で述べたように、徳川家は静岡(駿河藩)に移封され、幕臣たちの一部は静岡に移ったが、残ったものは幕臣としての職を失うこととなった。

来助は、一時浪人の身となったが、その時に「此藩臣たらんか、狭小なる封疆豈余が志を伸ぶるを得んや」⁽³⁵⁾と、従来の進路を転じて商業に従事しようかと思案していた。英語力をさらに上達させ、その能力をもって外国商人との間に周旋すれば、自身の資産をつくとともに、商業上国富を興す上で貢献できるだろう、と。そして来助は「官たる民たる何ぞ択ぶ所あらん。報国の志より見れば、何ぞ之を賤しとするの理あらんや」と述べているが、これは偽らざる気持ちであっただろう。しかし、これを再考させたのは、これまで抱いてきた「国利発揚の志」であった。そして、「余が意志を成さんには大政府の吏員たらざる可らず。否らざれば広く国民をして文明の域に進み天賦享有の知を關かしむるを得ず」と考え、あくまでも大政府に活動の場を求めるも、「余が志願の事は徐に其道を開いて可なりと決心し」、勝海舟の求めに応じて

32 薩摩藩へ断りの信書を送ったがそれが途中で行方不明となり届かなかったため、結果的に同藩との関係がこじれてしまう。

33 前掲、橋本輝夫監修『行き路のしるし』、15頁。

34 この時来助が教えた子弟たちの中に、星亨がいた。

35 『自叙伝』、64頁。

駿河藩士として出仕することを選んだのである⁽³⁶⁾。

来助は明治改元の2か月前の7月に勝海舟の要請で駿河藩留守居役、9月には公用人となり、旧幕府の完結処分（江戸の引渡しと士族の処置）と新立した駿河藩の経営措置（事務）など種々の業務に携わることとなった⁽³⁷⁾。そして、明治2（1869）年来助は遠州中泉奉行となり、江戸から移住してくる無禄の士族を収容するという職務を担うこととなった。土地の富農たちを説得し、その資金によって移住してきた無禄士族のための長屋を建設した。また、士族やその家族に質素労働の風潮を興すため、来助は勸工場を設け、妻奈可を指導者として織物を指導させ、上州より労農を招いて養蚕業を習わせたりした。さらに撃剣道場や学校を設け、来助自身が教職の一員となり、ある時は授業と併行して本来の奉行職（訴訟）にも対応するという、「頗る苦心を要する」職務であった。その後、静岡藩開業方物産掛として静岡に戻り、藩内の要地を巡回して産物の状況調査の仕事にあたった。この時期に、前島は自身を「前島密」と称するようになった。

前島密が「幕臣」として仕えたのは約3年間、駿河（静岡）藩時代を含めても4年間と短い、この期間は実に濃密な時間であったと考える。藪内吉彦氏は、幕臣時代の前島を「体制内構造改革論者」と評している⁽³⁸⁾。国を代表する「大政府」（＝幕府）の内において実務をこなしながらその利のためにさまざまな施策を講じてきた経歴を見てみれば、藪内氏の評価は前島の性質を的確に指摘していると思われる。

また前島は、幕臣となって間もない慶応2年12月に「漢字御廃止之議」、大政奉還後の慶応3年12月に「領地削減の議」を将軍徳川慶喜に建言し、慶応4年3月に明治新政府の実力者である参与大久保利通に「江戸遷都の議」（提出文書の名称は「大久保に与えて東遷を論ずる書」⁽³⁹⁾）を提出している。これらの建言は本来詳細に取り上げるべき内容であるがいずれも長文であるため、ここでは建言の要旨のみを示しておきたい。「漢字御廃止之議」は、国家の大本は国民の教育であり、その教育普及のためには平易な文字による言文一致が望ましいとする見地より漢字の不合理性を説き、仮名文字を国字にすべきと主張したものである。「領地削減の議」は、朝廷が内外に対して大政を処理するには莫大な費用を要するため、この機に徳川家の所領の3分の2を削減して朝廷に返還するよう建言したものである。「江戸遷都の議」は、大久保が慶応4年1月に提出した建白書によって新政府の中心となる首都を大坂に移すという「大坂遷都論」の意見を出したのに対し、江戸を首都とするのがふさわしいと主張するものであった。

それぞれ建言の目的は異なるが、いずれも前島が属する幕府ではなく、新たに建設される国家を見据えている点で共通している。前島は戊辰戦争で幕府軍が敗れた時に、「我軍の敗北は遺憾至極なるも、之を我国状に照して考ふれば、或は之を慶事とせん。若し我軍にして勝利を得たらんか、百難紛起し、遂に外国の乗ずる所となりしなるべし。薩長其他の有志も、単に其藩に私せるに非ず、其藩力を以て皇威を回復し、建国の基礎を確立せんと謀れる者なり」⁽⁴⁰⁾と回顧している。

以上は、前島が後世に語った内容であるが、前島は建言書を提出した当時においても、「帝國政府」⁽⁴¹⁾「大政府」という言葉を用いている。これは明らかに藩・公儀（幕府）・禁裏（朝廷）といった近世の政治秩序を超越した、これから確立されるべき「国家」（新政府）のことを指

36 『自叙伝』、65頁。

37 前掲、橋本輝夫監修『行き路のしるし』、16頁。

38 藪内吉彦「日本の夜明けと前島密」『話』第552号、（財団法人通信協会発行）、2001年1月、12頁。

39 『夢平閑話』、442～444頁。

40 『自叙伝』、50頁。

している。「慶喜公ニ上ル書ノ草稿」には、「大政御返上ハ我公殿下至誠之御深慮ニ出タルハ、毫モ疑ヲ容サル所ナルモ、朝廷ニ於テハ御返上ノ大政ヲ処理シ、且帝国政府ノ体面ヲ保持スル経費ハ巨額ナルヘク、又帝国ノ現状ハ外ニ対シテ海防ノ設備薄ク、内ニ在テハ政治挙ラス、畢竟外人ヲシテ侮蔑ノ念ヲ生セシメ跋扈ノ暴ヲ恣ニセシムルモ、其原全ク茲ニ存ス」⁽⁴²⁾とある。領地削減の目的は、倒幕の気運を鎮めることと、新政府の財政を支援することにあつたが、一面でこの建言は將軍（幕府）に対する批判とみなされかねない危険な行為でもあつた。それでも前島は、新政府の整備を行い、海防の設備の充実が最優先と考えたのである。そのため、幕府と新政府（朝廷）の争いが長引くことによって、国内を混乱させ、外国に付け入る隙を与えてしまうことを危惧していた。奥羽越列藩同盟の中にあつて最終段階まで政府軍との戦争に反対する立場をとり、戊辰戦争の際には新政府の指導者三条実美や木戸孝允らとの話し合いを求めて京・大阪間を奔走し前島を頼ってきた米沢藩士・宮島誠一郎に自分の通行鑑札を渡して便宜を図つたこと⁽⁴³⁾、幕府軍として最後まで徹底抗戦をしようとした者たちに対し危険を顧みず直に諫言したことは⁽⁴⁴⁾、前島の抱く理想の社会に向けて迷いなく行動を起こす信念の強さを体現している。前島の目指した理想の社会とは、国際社会の中にあつて欧米列強に伍するだけの力を備えた統一国家であり、それは文明開化の礎となるべきものでもあつた。

5 むすびにかえて

明治2年12月28日（1870年1月29日）、前島密は政府の要請により民部省改正掛に勤務することとなつた。改正掛とは、同年11月18日（1868年12月20日）に民部省に設置された部署であり⁽⁴⁵⁾、明治政府に必要な制度改革の素案を作成し、近代国家を建設するために設けられた。メンバーは、大隈重信、井上馨、伊藤博文ら幹部のほか、渋沢栄一を中心に、郷純造、塩田三郎、赤松則良、杉浦譲など外国留学・出張経験者や、前島密など欧米の事情に詳しい旧幕府の俊英たちで構成され、郵便制度、駅制、度量衡、貨幣制度、租税制度、鉄道敷設など、近代国家建設の礎となるものの創設について議論が行われた。改正掛およびそのメンバーの功績の詳細については、井上潤氏の報告に譲ることとし、ここでは元々医学を志していた前島密が幕臣を経て、なぜ明治前期に政治家的素養を持った実務官僚として経済・制度など「文明開化」の「外形」面の進展に貢献しえたのか、その要因について検討しておきたい。

18歳までの前島は、医学を志す書生であつた。生地越後国頸城郡下池部村、糸魚川、高田、江戸と学問の場を移し苦学しながら医学を学んでいたが、医学に限らず儒学や西洋事情等も精力的に学んでいった。特に海外事情と国内の現状を考えるきっかけとなつたのは、安積良斎の門下で薫陶を受けたことが大きいだろう。安積は朱子学を主としたが、陽明学や西洋の知識も積極的に取り入れるなど、多様な価値観、進取の気風を持った学者であつた⁽⁴⁶⁾。『洋外紀略』

41 郵政博物館には、領地削減に関する徳川慶喜への建言書の案文が収蔵されている（「慶喜公ニ上ル書ノ草稿」（慶応3年12月）、郵政博物館蔵、整理番号：8101-0602-A04）。この時点で、「帝国政府」という言葉が見受けられる。

42 前掲、「慶喜公ニ上ル書ノ草稿」。

43 『自叙伝』、60～61頁。

44 兵を率いて東北地方への脱走を図ろうとする大鳥圭介に対し「大に活眼を開き、日本帝国の形成を洞観し、以て天職を完うせよ」と説得し、駿河藩の艦船を奪って蝦夷地への脱走を画策する榎本武揚に対しては「大義に照して甚だ取り難し。今や本邦に最も乏しきは海軍の艦船なり。…（中略）…君何ぞ護国の念慮の薄弱なるや」と諫言している（『自叙伝』62～64頁）。

45 明治3年7月10日（1870年8月6日）に大蔵省に移管、明治4年7月27日（1871年9月11日）大蔵省と民部省の再統合時に廃止された。

のように、欧米列強が日本近海にも進出している時期に幅広い学識に基づく国防論も著しており、安積の門人には前島のほかにも栗本鋤雲など海外に目を向けた者が多かった。浦賀でペリー艦隊を実際にみた若き前島が志を変えたのも、安積に思想的に大きく影響を受けていたからと思われる。

「草莽の志士」となった前島は、その後全国の港湾を実際に見分し、江戸で兵学、機関学、箱館にて航海術、長崎にて英学、数学を学び、鹿児島で英学の教鞭をとることになった。その過程で様々なことを知識だけでなく実践で学ぶ機会と貴重な人脈を得ることとなり、同時に自らの理念も確立していった。

幕末期には、高い能力を持った人材が身分の壁を超えて幕臣として登用される機会が増えていた。「日本帝国の大政府」にて自らの志を果たすべく能力を発揮したいと考えていた前島は、平岡熙一の勧めで幕臣となった。幕臣となった前島は、当初開成所で翻訳の仕事、そして数学教授を務めたのち、兵庫にて港湾事務を務め、幕府倒壊後駿河藩士となった際には、旧幕府の完結処分と新立した駿河藩の経営措置の業務にあたり、遠州中泉奉行に命じられた際には、江戸から移住してくる無禄の士族を収容し、自活の道を促すといういわば「士族授産」の先駆けとなる業務にあたった。前島にとって幕臣（駿河藩士）時代は、「官」の実務に直接携わる機会を得たが、これは新政府時代に実務官僚として活躍する、いわば「準備期間」であったといえよう。

新政府成立後は、まだ全国統治のための機構や組織を持たなかったため、当初政府を支えたのは、幕府から継承した行政組織と継続的に「朝臣」として登用された旧幕臣たちであった⁽⁴⁷⁾。しかし、幕府時代以来の業務を繰り返すだけの役割は暫定的なものであり、やがて新政府の官僚機構が整理されていく過程で彼らは淘汰されていった。そのような中であって、前島は変わらず新政府の実務官僚として辣腕をふるい続けた。前島が改正掛、後に内務省の官僚として近代国家建設の礎となる諸制度を建策し、実現に貢献しえた理由の一つとして、前島が武士・農民・商人の範疇に収まらないマージナル・マン（限界の階層者）出身者であったことが大きいであろう。明治時代に入ってから様々な分野で活躍した幕臣たちのうち、前島、洪沢栄一、福澤諭吉などは、士農工商といった階級区分に収まりがたい出自であった。彼らは、幼いころより武士の教養と品性を身に着けている一方で、幕府時代の待遇や環境への不満をもっており、一定の身分への単純な融合ができないことから、生来の武士階級とは異なる「啓蒙的」な視野（実業家的感覚）を併せ持っていた⁽⁴⁸⁾。たとえば、前島は郵便事業の普及策として、各地の庄屋・名主、有力商人を郵便取扱所（郵便局の旧称）の取扱役に任命し、小額の手当てを支給し、郵便局舎を無償で提供させる制度を考案した。各地に眠る民間の力を郵便事業普及のために集結するという発想は、原点がマージナル・マンである前島ならではのものであったといえよう。

(たはら けいすけ 郵政博物館主任資料研究員)

46 前掲、村山吉廣監修・安藤智重訳注『洋外紀略 安積良斎』、346頁。

47 門松秀樹『明治維新と幕臣「ノンキャリア」の底力』中公新書、2014年。

48 大久保利通は前島のこの能力を高く評価し、新設された内務省（明治6（1873）年11月設置）において前島を継続的に重用した。石黒忠憲は、「大久保内務卿は他人に向ひ、随分尤らしき議論家もあるが、結局算数に至ると当れるものが少ない、そこに至ると、前島に於ては総ての議論が算教に基いて居るから、他に一頭地を抜くのであると申されたと聞て居る」と回顧している（『追懐録』前掲『鴻爪痕』所収、679頁）。